「紀式部集」（翻刻）

中西健治

凡例

一、本文作成にあたっては財団法人青山会所蔵本「紀式部集」（二二四号）を底本とした。

一、底本は一冊袋綴本、縦二八・二糎、横二〇・九糎の写本で、題簽、内題共に「紀式部集」とある。奥書はないが、良玄（南可）が校閲した旨の識語（「未見類本故以私了簡且校猶追可尋　南」）がある。

一、底本の丁附を（1・オ）（1・ウ）などと示した。オは表の、ウは裏の、略記である。

一、底本の表記を改めることはせず、また、底本にある見せ消ちもそのままに示した。

一、本文中の和歌に番号を付した。上には本集での通し番号、下には宇津保物語との関係を知るに便をはかるため、『校注古典叢書』の歌番号をそれぞれ示した。

一、その他、参考注記を若干付記した。

（「紀式部集」についての考察は、平成元年度中古文学会春季大会で概略を発表した。今般、一部補訂して、『中西智海先生還暦記念論文集・人間と世界』（永田文昌堂刊）に収載したので、併せて御参照いただければありがたい。なお、翻刻をお許しいただいた財団法人青山会に御礼申し上げます。）

翻刻

紀式部集

過しころ春宮たね松かまふけによりてわたらせ
給ふそのさままことにいみしまらう人たちのお
ほんともには少將のともの人にまつりこと人松
かたさうくわん春日のむらかけ府生しまのやす
のりつかひのおさ大やまとのさたまつ府生山部
のかすなり舎人は八人ふしとねりともおなし数
なり是らはものゝ師才人たちなりかたちあるも

「紀式部集」（翻刻）

のともをはえ」（1・オ）らめりつるそへには小舎人さふらひの人かたちをえらひてみゆそれらか前にも机ともたてゝいかめしきあるしをし給ふかくて御かはらけはしまりはしくたりぬ人〳〵の御まへの折敷ともを見たまひてなかたゝの侍従花薗のこてふにかきて

1 313花薗にあさ夕わかすいるてふを松の林はねたくみゆらん

少將きゝ給ひてやかてはやしの方なるうくひすにかきて

2 314常磐なる林にうつる鶯をとひらの花もつらくきくらん」（1・ウ）

たね忝かむすめの君こかねのえたにしろかねのさくらさかせて立らへ（マヽ）花に蝶ともあまたすへてそのひとつにかくかきつゝ

3 321桜花春はくれとも雨露にしられぬ枝と成そかなしきとなんきこえけれは君達見給ひて蝶ことにかきつけたまふ侍従

4 322雨露に梢はわかすかゝれはや花の枝とは人のしるらん

少將

5 323春かせの吹上に匂ふ桜花雲の上にもさかせてしかな」（2・オ）

あるしの君

6 324桜花雲に及はぬ枝なれはしつめるかせをなみのみそみる

らうすけ

7 325桜花そめいたす露のわかねはや底迄にほふ色もみゆらん

座につかうまつれる人〳〵これをうけてよめる

8 326桜狩ぬれてそきにし鶯の都にをるは色のうすさに

ちかまさ

9 327人伝にきゝこしよりも桜花あやしかりけり春のかさまは

ときかけ」（2・ウ）

あるしの君水の下の魚に

10 315底きよくなかるゝ水に住魚のたまれる沼をいかゝみるらん

らうすけ山の鳥ともにかきて

11 316芦茂る嶋より巣立鳥ともの花の林にあそふ春かな

又みなみの殿におはして人〳〵やまとの哥なと
つくりて琴にあはせてもろこゑにすんしたまふ
かゝるに少將かはかりおもしろきあそひにも有
ものから所からふきあけの浜辺をみわたし給ひ
花は色をつくしていま」(3・オ)をさかりと見せ風にき
ほひて行ちかふ舟ともゝいとけうありておかし
くみたまへは少將

12 317行舟の花にまかふは春風の吹上の浜をこけはなりけ
り

あるしの君きゝ給ひて

13 318春風のこき出る舟にちりつめは籬の花をよそに見る
かな

侍從

14 319行舟に花の残らす降しけは我も手毎につまんとそ思
ふ

らうすけ

15 320風吹はとまらぬ舟をみしほとに花も残らす成にける
かな」(3・ウ)

16 328しら雲にみゆる桜もある物を及はぬ枝とおもはさら
なん

たねまつ

17 329なておほすかひもなきかなさくら花匂ふ春にもあら
すと思へは

かくて例のきんたちは琴をはひきしもへわらは
ふえをなんふきすさふひねもすあそひ暮して夕
くれに大なる釣舟に蜑の桧縄をは一ふねくりお
きてこきわたるを少將は見給ひてこれかくみゆ
ともなかよりかこゝろさしはみしかからんかし
なといふ」(4・オ)をきゝてあるしの君うちわらひて

18 330くる人の心のうちはしらね共頼まるゝ哉泉郎のたく
縄

侍從うちきゝてこゝまてまいりくるもおとらし
かしと伝

19 331道遠き都よりくる心にはまさりしもせし海士のたく
なは

少將えみわらひて

20 332 爰にくるなかき心にくらふれは名にやたつらんおき
つたく縄
かくて日もかたふきぬあるしの君かくおもしろ
きところにいきほひあるすすひはし（マヽ）給へとよき
ともたちにあひたまふ事」（4・ウ）此たひなれはかくて
のみおはしまさんとおほせとさてものし給ふへ
き人〳〵にもあらぬをおもほすほとになきさの
かたに都鳥うちつらねて立をりには今ちとりの
こゑ〳〵なくをきゝてあるしの君

21 333 都鳥友をつらねてかへりなは独ははまになく〳〵や
へん
侍従わかきみをまさになとて

22 334 雲路をはつらねてゆかんさま〳〵にあそふ千鳥の友
にあらすや
少將」（5・オ）

23 335 都鳥千とりをはねにすへてこそ浜のつとゝて君にと
らせめ
ゆきまさ

24 336 君とはゝいかにこたへん浜にすむ千鳥さそひにこし
都鳥
宮家のつかひともいりみたれてのゝしりけるは
おほやけことはよろつにつけてなくさむ事もな
きにみたまひわつらひていはゆるゐ中人になん
なりにて侍る大將殿もたいらかにやはおはしま
すらん少將たゝいま大將とのはたいらかにおは
しましき京にはことなる」（5・ウ）事はなしこのくにの
前守うれへをなんいひのゝしるなといひて例の
ものゝ音ともかきあはせてかはらけたひ〳〵に
なりてきんたち大和哥あそはす藤のはなをおり
て松の千年をしると云題を国守の主

25 337 藤の花かさせる春をかそへてそ松の疑（よはひ）は知へかりけ
り
あるしの君

26 338 春雨のにほへる藤にかゝれるをよはひある松の玉に
こそみる（れ）
侍従」（6・オ）

27 339 藤の花そめくる雨もふりぬれは玉の緒結ふ松にそ見
えける

少將

28 340汀なる松にてれる藤の花影さへふかくおもほゆるか

な

らうすけ

29 341まとゐしていつれひさしと藤の花かゝれる松の末の

よをみん

国の権の守

30 342花の花かゝれる松のふか緑ひとつ色にて染るはるさ

め

御まへにさふらひける右近將監まつかた

31 343紫のいとゝみたるゝ藤の花うつれる水を人しむすへ

は

右近のそうちかまさ」(6・ウ)

32 344ふちの花やとれる水の泡なれはよのまになみのおり

も杜すれ

右近のそう時景

33 345藤の花色のかきりに匂ふには春さへおしく思ほゆる

かな

国のすけ

34 346匂ひくる年はへぬれと藤の花今日こそ春をきゝ初め

けれ

まつりこと人種松

35 347春の色のみきはに匂ふ花よりもそこの藤こそ花とみ

えけれ

なとうちすさみてあそひくらす其日のかつけも

のやかてまふけたりきんたち四所くにのかみこ

んのかみまてあをき」(7・オ)しらつるはみのからきぬ

かさねたる女のよそひ一具つゝ衛府のそうとも

よりはしめて国のすけにはこきむらさきのあは

せの紬長一かさねあはせのはかまひとへそれよ

り下はひとへなるものなと給はらぬ人なし

弥生のはしめに宮野かりにて給ふ御こもの人は

あをきしらつるはみあしけ馬に乗て御鷹すへた

り御まうけはあるしの君ひわりこともきよ

け」(7・ウ)にてもたせたまへりかくして御前ちかき

野にないとりあかをなとするほとにそのゝ花の

木ともこきませに左右の鳥とも立さはきてきん

たちえうちすき給はてあるしの君

36 348いりぬれは狩の心もわすられて花のみおしくみゆる
春哉
少將
37 349春の野ゝ花に心はうつりつゝ駒のあゆみに身をそま
かする
侍従うちきゝて
38 350今日は猶のへにつくらん花をみて心をやるも行にや
あらすや」（8・オ）
らうすけ
39 351花ちらす風も心のこまなりて我身る野へにしはしよ
きなん
とておほんわりこまいり鳥ともいさゝかとらせ
て玉津嶋にものしたまふ御まへにまふて給ひて
しはし逍遙したまひてかへり給ふとて少將
40 352あかすみてかくのみかへるけふのみや玉つ嶋てふな
をはしらまし
あるしの君
41 353年をへて波のよるてふ玉の緒にぬきとゝめなん玉出
る島
しゝうの君」（8・ウ）
42 354おほつかな立よる浪のなかりせは玉いつる嶋といか
てしらまし
らうすけ
43 355玉いつる嶋にしあらはわたつうみの波たちよせよみ
る人有とき
かくすさみあひたまひてみなかへりたまひぬ
三月つこもりの日に君達ふきあけの宮にて春を
おしみ給ふさくら色のなをしつゝし色の下襲な
とき給へりその日の御饗例のことしたりおしき
なとさき〳〵のにあらすかは」（9・オ）らけはしまりて
あそひくらす水の上に花ちりてうきたる洲浜に
春を惜と云題をかきてたてまつりたまふに少將
きこゆ
44 356水の上の花の錦をこほりとは春のかたみに人むすへ
とか
しゝう
45 357色〳〵の花のかけのみやとりくる水底よりそ春はわ
かるゝ

あるしの君らうすけ

46 358時のまに千たひ逢へき人よりは春のわかれをまつは

おしまん

松かた」(9・ウ)

47 359行春をとむへきかたもなかりけりこよひなからに千

世は過なん

ちかまさ

48 360春なから年は暮つゝよろつ代を君とまとゐはものは

思はし

ときかけ

49 361何方に行とも見えぬ春故におしむこゝろの空にも有

哉

たねまつ

50 362まとひして惜む春たに有物をひとりなけかん君はい

かにそ

なんとてけふのかつけ物はいろの小掛かさねた

る女のよそひとそきこゆ御ともの人〳〵にはお

なし色のあやのこうちき」(10・オ)にはかまひとへうへ

きあそひあかす

かくして四月一日にきんたちかへり給ひにける

かゝるほとに国のかんのぬし今日いてたちたま

ふなりとてゆくさきにとまり給ふへき御事まう

けしにつかはしてみつからは吹上の宮にくにの

つかさひきゐてまふてたまへりかくてものゝ音

なと手なくかきあはせてあそはしつゝ日たかく

なり行はいそき給ふおりにあるしの君かはら

け」(10・ウ)とりてかくの給ふ

51 363かたらはぬ夏たにもあるけふしもや契りし人のわか

れ行覧

少將

52 364かへつとて君をこふへきころもをやされ共夏はうす

き袂を

しゝう

53 365立かへりあはんとそ思ふ夏衣ぬるなるそてもかはき

あへぬに

らうすけ

54 366夏衣けふ立たひのわひしきはおしむ涙ももるゝなり

けり

袞かたさき〳〵も侍しかはなとて

55 367このたひはまとゐぬへくそおもほゆる泪はこゝに先に立とも」(11・オ)

ちかまさ

56 368かくはかりあかす侘しきわかれちはふたつなきにもまとふへき哉

ときかけ

57 369夏蟬の羽に置露の消ぬまにあふへき君をわかれてふ哉

たねまつ

58 370初声にわかれをおしむ郭公身をそ月にやけふを知らん

となんいひてかはらけたひ〳〵おしまはしぬかくしてをくりものひきいてものまふけたるかすの事たてまつり給ふ御馬ともかさりそうそきてわきあ」(11・ウ)けのきぬきたるみまやの人ともむま一疋にふたりつけつゝこまかたさきにたてゝこまあそひしつゝいてゝつき〳〵に見な引ならへたりかくてものおほせたる馬ともはをくれていてゝかゝりひきいてものゝをりことにらんしやうしまひすたねまつかきたのかたきんたち三所にぬさてうしてたてまつれりしろかねのすき箱四つつゝくろほうのすみひとすきはこかねの砂にしろかね」(12・オ)こかねをぬさにしたるひとすきはこはこのうへに哥一やりてむすひめにはりつけさせたりとなん少將には

59 371今はとて立としみれは唐衣そてのうらまて塩のみつかな

侍従のぬさ入たるはこに

60 372故郷にかへるぬさたにとりうきをやとに侍らん人をこそ思へ

らうすけには金の砂いりたるに

61 373君かため思ふ心はありそうみのはまのまさこにをとらさりけり

そこよりかんのぬし帰たまひなんとするおりに

みやことりとをきこゑにき」(12・ウ)こゆる少將

62 374名にしおはゝ関をも越し都鳥声するかたを百敷にして

しゝう

63 375いとゝしく越うきものを都鳥関のこなたに聞かうれしさ

らうすけこなたをし見て

64 376夕暮に立はなれたる駒よりも泪の川もはやくゆきける

あるしの君

65 377行人の駒もとゝめぬたなはしはをしみとりたるかひもなき哉

かんのぬし

66 378なきたむる泪の川の瀧つせもいそく駒にはをくれぬる哉」(13・オ)

かくして関よりわかれて京の人はのほりゐ中の人はかへり給ふ四月四日はかり夜更てなん宮内卿殿におはしをちつきたりとなんきこゆあるしきんたちにはくろかいの机ふたつうすものゝおもてなとたてまつるのちかはらけをとり給ひていかに浜のほとりのかいこをらに山さとの草木をはきこしめしくらふらん少將されと是をのみなんとて

67 379山里にこのめをおきてわかれては浜の辺にかひそ○なかりし」(13・ウ)

宮内卿のぬし

68 380木をくちみふたつときえぬ枝なれはあかす哀と思ふこのめそ

なときこゆ少將宮内卿のぬしに沈のわりこ斗なとたてまつり給ふ〈以上、吹上上巻ニ相当ス〉

かゝるほとに歳月すきてそのときの帝をりゐたまふ春宮国しりたまひて世中をたやかにまつり事とりおこなはせ給ふとなんきこゆあるとき兵部卿の宮(みこ)おもしろき桜のえたをおらさせたまひて沈の男つくらせたまひ」(14・オ)て花の雫にぬれたるにかく書つけてあてみやの御もとに奉り給ふ

69 118立ちよれは桜の花笠にほふ野も猶侘人はこゝら濡けり

さるは二葉にもとおもひ給へつるものをとて奉れ給ふあて宮み給ひて簑虫つける花ををらせた

まひてそれかしたにかさきせたる事の供たてゝ
かくかき付給ふ
70 119かくれたる三笠の山のみの虫は花のふるをやぬるとい
ふらん
御つかさの少將なかよりにの給ふよろつ」(14・ウ)の事
こゝろにつく日になんあるたゝにやはあらん和
哥の題にすへき事すこしえりいたし給へとの給
ふなるよりつかうまつりにくき事かなといひ
てかきいたすあはれけふは春のなかはねまちの
月をきのふといひて花のにほひをさそふうくひ
すのこゑをむかへ春の厂金の友をさそひつゝな
り河辺のかものあしまにあさ行(リ)このめのはる春
日の宮にわたりかゝれは花の」(15・オ)鶯えたにさふら
ひ松のせみ梢にをとろき山のさくら時にのそめ
り春の藤のいろわつかに柳のいとをむすへりあ
したの露みとりのころもなり夕の雲きなるにし
きなり山辺に冬わかく野へに春をひたりけふを
みるちかき野へは花をうらやみこゝをきく遠き
山には雪の峯をうつす雪の下草おひて霜の上の
なさかりなり梢のみとりほのかにくれなゐのむ
めすゝめり春」(15・ウ)の蕨に雪きえ石の火に氷とくと
きをさらぬ(と)松春をかさぬる花のへにしつかなる
人山にさはく鹿かせになひけるえた雨にしたか
ふ草春をおしむはな夏をもよほす虫秋をまつ木
の葉冬をいなふる鳥とかきいたして兵部卿の宮
にたてまつる御らんしてねまちの月を
71 120昨日こそねまちもせしか春のよのこよひの月をい
かゝみるらん
とかきて中務の御子にたてまつり給ふ」(16・オ)
中務の御子花をいさなふ
72 121我宿(に)のうつしてしかな野へにいてゝみれ共あかぬ花
の匂ひを
兵部卿の御子うくひすをむかふ
73 122里に吹花にうつしておく山の松にをくるな鶯のこゑ
左の大臣鳳のつらを
74 123故郷にともし残さす行厂は爰にて空をすくさゝらめ
や
左大將河辺の鴨を

75 124水鳥のつらねてうつるあすか川をるなるあやはけふ
やみるらん
右大將木のめの春
76 125松のねにふす山人は野へをみるけふそ柳のはにもし
るらん」(16・ウ)
民部卿源さねまさ春日の宮
77 126氏人のまとゐるけふは春日野ゝ松にも藤の花そ咲ら
し
左右衛門のかみ藤原きよまさ花鶯を
78 127枝毎にいもせつらぬる鶯のとくらをせはみ花そちり
ける
中納言平のまさあきら忝の蟬
79 128松風の声にくらふる琴のねを知るゝせみはしらへ
つゝめや
左大弁源さたすみ春をさとる哥
80 129琴のねに春の草木のをとろへはをのれを人や引とな
るへし
右衛門おなしくもろすみときにのそめる桜を」(17・オ)
81 130棹姫のほのかに染る桜にはよひさしそむる藤そ嬉し
き
左近中將すけあきらわつかなる藤
82 131松よりもはひこほるゝそ藤の花今一入のあかす見ゆ
るは
おなしき中將在原のもとゆきむすへる柳
83 132花さかぬ枝にもてふはむつれけり柳の原も結ほゝる
らし
宰相さねたゝ春の雨こゑいてゝ
84 133花をのみむらこにそむる春雨はときはの松はつらく
みゆらん
宰相なをまさ花風をうし
85 134竿姫やものうからん春のゝに花のかさぬふ枝のみえ
ぬは」(17・ウ)
とてむかひたる人の四位よりはしめの人に給は
りて左中將さねよりおとろう梅
86 135白妙の衣とたとる梅の花めにみす〳〵もおとろふる
かな
右近の少將源なかよしあしたの霜みとりなり
87 136鶯の羽風を寒み春日山霞の衣けさはたつかも

おなしき少將もとかた雲のにしきをなんよめり

88 137大空にかせのをりしく錦をは谷より雲そ立渡る
（18・オ）
らし」

おなしき少將かすさね冬わかく春おゆ

89 138見渡せは雪ふる山も有物をのへのわかなのおひにけ
るかな

左衛門佐あきすみ雪をうつす山

90 139富士のねのかすかの春をよそにみてかのこの雪も今
やきゆらん

同しきゆきまさ雪の下草を

91 140雪のうへしゐて草木のもゆれはや春日の飛火有とい
ふらん

兵部卿の少將かねすみ霜のうへのな

92 141春日野ゝ雪間におひしわかなをは野守はみきやけふ
つまんとは

侍従なかすみはつかなる木のめ

93 142春をあさみ野へのこのめもまたしきをいつこよりつ
（18・ウ）
むわかな成覧」

侍従源たゝまさ紅の梅

94 143春雨の花に降置くれなゐに染てそむらし春のさほ姫

侍従藤原なかたゝ蕨きゆる雪

95 144雪とくる春のわらひのもゆれはやのへの草木のけふ
り出らん

侍従かねとき石の火にとくる氷

96 145春わかす冴るかはへのあしのめは石より出る火にや
もゆらん

侍従これかせときをさとらぬ岑

97 146みる人のよはひは千代のあたりをや緑の松は春を待
らん

侍従もとまつ春をかさぬる花

98 147ふたゝひやこゝの桜は匂ふらんおなし花にも春をそ
（19・オ）
ふれは」

大夫ちかすみ野へにしつかなる人

99 148春ふかみ汀の芹もおひぬらし今はものうしわかな摘
人

式部丞きよすみ山にさはく鹿

100 149萌ぬ（渡）る草木もあらぬ春へには山へにそむく鹿そふむ
らし

右衛門尉よりすみかせになひける枝

101 150鶯の冬のねぐらや春立はかせのなひかす柳なるらん

蔵人ふちはらなりとを雨にしたかふ草

102 151春雨のふるをか野への草木とや秋のやとりの虫は頼まん

木工のすけこれもと春をおしむ花

103 152竿姫はいくらの春をおしめはか染出す花の八重に咲らん」(19・ウ)

兵衛の丞ふちはらのちかまさ秋をまつ木の葉

104 153春わかみほのかにみゆる木のめには秋こそいとゝ遠くみえけれ

右近のせうきよはらのまつかた夏をもよをす虫

105 154春山の木のねの蟬はすをせはみ夏のこのはや恋しかるらん

右兵衛の丞在原のときかけ冬をいなふる鳥

106 155冬山にすくひし鳥も冬寒み春のさとにや宿とるらん(やとり本ノマヽ)(20・オ)

右兵衛せうもとすけまとゐにたらぬ月」

107 156わかともの野へのまとゐにをくるゝは過にけらしな春の望月

おなしきせう平のこれすけをくれたる日に

108 157朝かけに遙にみれは山陰(の端)に残れる月もうれしかりけり

かくして年月ゆいて大將故院には世中にまた侍りときこえさせしゆるされさりしいとまをしのひてまかててやかてまいらすしかはおつみつみ(もき)侍りなんそれなん今におそろしくかなしき事には侍ると云おとゝ桜いろ」(20・ウ)のあやのほそなか一重をもていて給ひてたひて

109 160咲花をかくとちつれとことの音をしらへて帰る風そとまらぬ

との給へは

110 161いにしへにけふをくらふの山風は花の衣をふきかへすかな

といふ夕暮にかすみをさそふかせはけしくて御まく吹上たるより見いるれは君達三所めてたくきよらにておはします中にあてみやこよなくまさりて見え給たゝかくありかたき御かたち」(21・オ)とものの中にこよなうまさり給へりさるへき人にこ

そなとおもふにとしころかけて思はさりつるむ
かし思はてられて世中に猶あらましかは今はた
かき位にもなりなましなとおもひたれと又こゝ
らのとしころ露霜草かつらの音をときにしつゝ
仏のおほんことならぬ事をは口にまねはてつと
めおこなひつるほとけのおほさん事おそろしく
なとおもひかへ」（21・ウ）せともせんかたしらすおほゆ
れはちりおつる花ひらに爪もとより血をさしあ
やしてかくかきつゝ

111 162 浮世とて入ぬる山を有なからいかにせよとか今も侘
しき

春宮より柳に御文つけて右近の少將を御つかひ
にてしは〳〵も聞えまほしけれとなるゝはとか
いふなる内にもこのころまいり給ふへきやうに
有しかはなんいてや

112 163 たのめこし春立しより青柳のいとやくるとも思け
る哉」（22・オ）

とて奉れ給へりとなんおとゝみたまひてかしこ
くかくの給はするをいかゝ御かへりきこえさら
んかくもきこえさせ給へとてかき付たまふ

113 164 春立（たて）と身のかすならぬ青柳は花にましらん事そくる
しき

といひて中のおとゝに奉れ給ふつれはあて宮か
きて奉れ給ふとなん女のさうそく一具かつけ給
へは宰相かく聞え給ふ

114 165 涙さへなき世なりせは我恋の身より出るをいつちや
らまし」（22・ウ）

この御返しはなし兵部卿のみやより

115 166 山彦もこたへぬ空に鳴田鶴は天の川原にひとりふす
かな

この日ころ里すみのかひなさにうちにのみなん
ときこえ給へりあて宮

116 167 こたへうくおもほゆるかな蘆田鶴のつるてふ名をも
独なかねは

平中納言殿

117 168 水まさる淀のまこものおひの世にふかく物思ふ春に
も有哉

こたみは御かへりなし三の御子かく人のきこえ

給ふをみ給て

118 169 すたつともみえぬ物から鶯の山のいろ〳〵ふみもみ
るかな」(23・オ)

ときこえ給へれは例のいらへ給はすかのなか
たゝの侍従うちの御つかひに水の尾といふとこ
ろにまうてゝそのかへりにおかしき松におもし
ろき藤のかゝれるを松の枝なから折てもていま
して花ひらにかくかきつくとなん

119 170 奥山に幾代へぬらん藤の花かくれてふかき色をたに
見て

かくなんとたにとてうわう(マヽ)の君にこれ〳〵御ら
んせさせ給はゝこのはな給はりてをき給へれは
今たゝいまとく」(23・ウ)内にまいりぬあてみや御らん
して人〳〵の中にこともなしとおほす人なれは
かく書付て給

120 171 ふかしともいかゝたのまん藤の花かゝらぬ山はなし
とこそきけ

そわうの君なかたゝに見せたまひけるとなん右
近の少將なりよりもとしころいかて聞えんとお
もひしかとつのはくなくうちくらしぬこののり
(いてイ)
弓の御あるしにかいまみてのちはふししつみ病
になりてふしぬさるを殿へ」(24・オ)春日まうてにから
うしてをきあかりたりしになくさみてあれとな
をえあるましかりけれはおかしき柳のもえいて
たりけるにかきて付たり

121 172 物おもひの枝にこもれるものならは萌渡るともみせ
すそあらまし

あこきみにこれなかのおとゝにもてまいり給へ
とて奉るあてみや見たまひてあなむくつけ見る
ましきものかなとて引結ひてすて給ひつしゝう
のきみはみ給ひてかくなん」(24・ウ)

122 173 人しれぬ泪の川となかるゝをいかてたまれる水とこ
たへん

となんきこゆ例のこたへ給はすゆきまさかくき
こえたり

123 174 玉札の終にとたえぬ物ならはむなしき身とも成ぬへ
きかな

返しなしとなん　〈以上、春日詣巻ニ相当ス〉
かくてあて宮に侍従のいとこゝろほそくものし
つるをわたりてみたまへ物のはしめにいとうた
てとおもへとたいめんせんとものしつれはなと
のたまふあて宮こゝろうしとはおほせともき
こえ」(25・オ)たまへはわたり給ふ宮おとゝのすみ給北
のおとゝにふしたまへりあて宮そのころ御かた
ちのさかりなり御たけ五しやくに今すこしたら
ぬほといみしく姿おかしけに御くしのこるはし
くきよらなるむらさきの衣をやうせる事おひた
るかきり末まていたらぬすちなしめてたき事か
きりなしとなんひやうゑの君そわうのきみはか
り御ともにおはしたりと」(25・ウ)きこゆしゝうの君見
たてまつり給ひてとみに物もきこえ給はすから
うしてけふやまいり給ふ御をくりをたにえつか
うまつらすなりぬる事いきて又たいめい給はら
ん支かたくもあるかなと涙をなかしてきこゆと
なんあてみや心にもあらすのみなんいてやなと
かはかくのみはものし給ふらん侍従なをえ侍る
ましくこそおほゆれよろつの事心ほそくかなし
くてときこゆあて宮さなおほしそ」(26・オ)とてたち給
ふ
124
578ふしまろひから紅になきなかす泪の川にたきるむね
の火
と書てちいさくをしもみて御ふところになけ入
あて宮ちらさしとおほしてとりて立給ひぬるを
見るまゝにたえいりていきもせすなりて見え給
へりとなんみやおとゝあるか中にもかなしき子
のかゝるめをなん見る事よと共に絶入はかりそ
かなしみ給ふとなんされとも生死のみちなれは
ちからなくけふりとなし給ひてあと」(26・ウ)の御いと
なみとりおこなひ給ふ人〳〵まいりつとひてと
ふらひ給ふ中にも源少將もくの君にあひたてま
つり給ひてとみにものもいはて涙をなかす事か
きりなししはしありて御をくりをたにつかうま
つらて過ぬる事こそほゐなけれかきりの事を
きゝ侍らてたいめいせさるこそいみしう悲しけ
れとて

125
580今はとてふりつる時は紅の泪とまらぬ物にそ有ける（27・オ）
もくの君うちきゝ給ひて心ほそくもの給」もの
かなとしころはけに心さし有てきこえ給ふと見
たてまつれともかひなくてかくむかしかたりに
成給ふ事よとて

126
581ふかき色に君しもなとかふりつへき誰もとまらぬ泪
ならぬを
さても少將はいふはかりなくなきまとひかなし
ひ給ふかやかて法躰（マヽ）になりて世中をうしろにそ
見給ひける月日ゆいて春宮はあてみやの御かた
へおはしましけり宮はうたゝねいり給へるけし
きに見え給ふを春宮やをらさしより給ひて」（27・ウ）う
こかしまいらせ給ひて

127
582めつらしき君に逢夜は春霞あまの岩戸をたちもこめ
南
ときこえ給ふあて宮うつゝともおほさす御返し
もなかりけりとなんこゝは大將殿御局なりあて
の君中納言は御とし十九そはの君廿一そちの君
十七宰相のおもと十八兵衛の君廿中將小弁こた
いふのこもくの君少將の子少納言左近右近ゑも
んなといふ人いとおほかりうないなと御前にさ
ふらふ左大弁のきみ」（28・オ）なとまつり給へりける
こゝに宮おはしましてしやうの御琴なとかきな
らしあてのみやと碁なとひねもすうちくらし給
へりとなんつきには中將たち殿上人あつまりて
攤（たうち）あそひするにうへちかき御局なれは思ふ
まゝにもあらす物しつやかにみゆかゝる折に鴈
のおほくつれてなきわたりけれは宮この鴈はい
つちそやとの給へは中將なかたゝ

128
583つれて行鴈金きけはあかてのみ春の宮より帰るとそ
（28・ウ）きく」
宮の御

129
584あかてのみわかるゝ鴈の手向には花の錦もとちられ
ぬ哉
左大將

130
585青柳のいとまおしとて鶯の鴈の手向もとちすや有覧
源少將（中）

131
586帰行鴈の羽風にちる花をおのか手向の錦とや見ん

中將さねより

132 587故郷へつはさやすめに飛鴈も今宵はこゝを過そ鳴な
り

左兵衛佐

133 588しら雲の鴈の手向のにしきとや山のはかせにおり乱
るらん」(29・オ)

左近中將

134 589ほころひてわかるゝ鴈の故郷をいまやとふらん天の
羽衣

中將すけすみ

135 590花をおる春はへぬれと鳴鴈のかへれる数を知人のな
き

左衛門佐

136 591鳴鴈にうかへる雲のゆきかひていつくに待と契をき
けん

なとこれかれの給ひてあくる宮より人〻にかつ
けものともそこ〳〵いたし給へりけるとなんか
くて源少將は山にこもりにし日よりかたく穀(ごく)と
塩をたちてこの」(29・ウ)み松の葉をすきて六時まなく
おこなひてなみたを海とたゝへなけきを山とお
ほして暮し給へるを帝をはしめたてまつりおし
みかなしみ給はぬはなしとなん中にも大將殿お
もふこゝろやありけんあはれなとの給ふたかき
山をたつねてて上人きんたちとひ給ふをみつ
からおはしつゝとひ給ふを頭中將源中將兵衛の
すけなとはおかしきもてあそひしたるものをお
かしこと少將をよひて花」(30・オ)つみかてら北(マヽ)の尾に
おはしたり少將よろこひて前(ゝ)対面してものなとい
ふ人に泪ををとさぬはなし頭中將あか仏なとか
かく思はぬさまにてはものしたまふなかたゝら
かたとき世にふへきこゝちもせねともおやにつ
かうまつらんとおもふこゝろふかけれはしはし
ましらひ侍れとかくておはするをみ侍りけれは
まつかなしくなんとて

137 592打みれは泪の河となかれつゝ別ち思ふ瀬をしらぬ
身は」(30・ウ)

少將

138 593世中をおもひ入にし心こそふかき山へのしるへなり

けり（れ）

源中將

139 594蝶とりのあそひし花の袂には太山の苔のおひんとやみし

となく〳〵物かたりしてかへりぬ大將とのゝ君達ものしたまへるにもたいめんし給ひて物かたりなとしてかへり給ふに付てあて宮の御もとにかくきこえ給へり

140 595紅の袖そかたみとおもほえし今はくろくもそむる涙か

是ならぬはなきこそいみしくなときこえ」（31・オ）たりあて宮あやしくも成にけるかなものいひし時いらへもせす成にしをかく哀になりにたる事今は何かはと思して

141 596今はとてふかき山へに墨染の袂はぬれぬ物とこそきけ

とのたまへり少將みて涙をなかして此御文をふしおかみておもへはいよ〳〵後の世ふかくそおほし入にけるありほとけ（かイ）宮のたうとけれは參り給ひてのち一くたりにてもみるなりとおもひてかしこきたからにすへし水の尾の高」（31・ウ）き山のいたゝきに日かけ庵なとある成におかしけなる道ありこゝに殿上人いましたり少將あさのよそひあさやかにてたいめひし給へり山のうへよりおほひなる瀧をちたり弟子一人はわかうより上につかひつけ給へる童子ひとりそれも舎人につかひ給へるいろ〳〵花の木ともしけく生たり少將はたうをかさりてねんすしたりいとたうとしさて宰相は東坂本に小野と云ところにいき」（32・オ）て大願を立よろつ神仏にいのりてなきこかれつゝまとひ給ひけれはからうしていきいてたれともうしやうにもあらす宮つかへにもをよはてたゝつれ〳〵とありふれとかなしく覚ゆれは小野より兵衛のきみのもとにかく聞えたり

142 597かく斗消るわか身に年をへてもゆる煙のたえすも有哉

いつれの世にかおもひ給へなくさめんあないみしやときこえたりあて宮み給ひてあはれとおほ

せとものの給す源宰相かなしくお」(32・ウ)ほゆれは
三月つこもりかたにかく聞ゆ
143 598 かけていへは　ちりもくたくる　たましゐに
ふかきおもひの　つきしより　いりえのとこに
としをへて　つらをならへて　すむとりの
行衛もしらす　をしのこの　たちけんかたも
おもほえて　きなる泉に　きえかへり　涙のか
はに　うきねして　いまや〳〵と　頼みこし
君かこゝろを　かきりそと　思ひし日より　山
さとに　ひとりなかめて　もえわたる　ふかき
山へに　みつしほは」(33・オ)袖のもるまて　たゝへて
も　みるめもとめん　かたもなき　いまはかひ
なき　こゝちして　なこりそ物は　かなしかり
ける　なときこゆれとも御返なしかくおほつか
なけれはさらにわすれきこへすとをり〳〵につ
けて猶きこえけりましらひもせす宮の御もとへ
もまいらすなかめ給へり月日をへて身はよはく
なりつくえたえましく覚ゆれはあてみやにかく
きこえ給ふ

144 599 いひゐても終にとまらぬ水の泡をみこもりてこそ有
へかりけれ」(33・ウ)
となんよみてまいらせ給ふとなん

《以上、あて宮巻ニ相当ス》

かくて殿より祭の使出立給ふ兵衛つかさのつか
ひには中將君内蔵寮のつかひにはくらのかみを
かけたるゆきまさ馬寮には式部卿の宮のむまの
きみと出立給ふあるしのおとゝ三所のつかひを
いたはりいたし給ふみな出立給ふにちしおとゝ
つかひの中將にかさしをたてまつり給ふとて
145 221 ふた葉なるまつらかつらとみし物をかさしをる迄成
にける哉」(34・オ)

つかひの中將

146 222 もとみれはたかきかつらもけふよりや枝をとりすと
人の云らん

とて出給ふに桂より左大將ぬしよき御馬ふたつ
ひとつはかさりひとつはまうけ御馬にて舎人三
十人えもはかすそうにかせてとりものせさせて
かねの枝にちいさき壺を付てそれにかつら川の

水を入て仲忠して

147 223かさしとるそてのぬるゝは白波のかつら河よりをれる也けり

これにあやしうとの給ふとなんつかひの(34・ウ)」君かくきこえ給ふ

148 224水上にかさしつる哉桂川けふ人なみのこゝちのみして

けふは暮にのみなんと聞えて出たち給ひぬ大みやつかひの君み給はんとて車十はかりしていてたち給ひぬ大しやう殿へ南のおとゝに使三所つき給へり垣下(えんか)に御子四所上達部五所四位五位あはせて六十人はかりありとなんおほん馬ともひきたてゝたちならひたり一条の大路に物見車ともかすしらす殿の御くるま(35・オ)」とものしたる榻(しぢ)とも立つゝ四位五位まきちらしたる事かすしらす春宮よりかくきこえ給へり

149 225今年よりつむへき物か千早振かもの祭にかさすあふひは

ときこえ給ふ例のさいしやうやよひはかりにまろにこその給はさらめ君達とものゝ給ふをたにきかせ給へなとせちしのたまひけれはちかき所にすへて御琴ひかせたてまつりものいはせたてまつりなとしけるをきゝてよりおもひ入(35・ウ)」てふしにしまゝに物おほえねとかくきこえたり

150 226奥山のふるすをいてゝ郭公たひねに年そあまたへにけり(る)

あか君やかてたに今はえきこえさすましきこそいみしけれなときこえたりあて宮

151 227夏はかりうゐ立すなる時鳥巣にはかへらぬ年もあらしな

兵部卿宮より

152 228ぬるみ行板井の清水手に汲て猶こそたのめそこはしらねと

あて宮

153 229あた人のいふに付ても夏衣うすき心も思(そイ)ひしらるゝ(36・オ)」

平中納言

154 230何とても侘しきものを時鳥身を千(初)花のいとゝ咲かな

あて宮

155 231かひもなき巣をたのめはや郭公身をうの花の咲もみゆらん

仲忠空蟬の身にかく書付て奉る

156 232ことの葉の露をのみまつ空蟬もむなしき物とみるかわひしき

ましていかならむときこえたりあて宮

157 233ことの葉のはかなき露と思へ共わか玉章と人もこそみれ

と思ふになんきこえにくきときこえたまへり紀伊国の吹上の君のもとよりいかてとお（36・ウ）」もひけるを人さへかたりきかせ給へれはしつこゝろもなくおほえけれはあるか中にかとある童してかく聞え奉る

158 234おほつかないかて心をつくはねのまつかけなしと歎なるらん

大將のおとゝ見給ひてたゝいまの罵る人にこそはあんめれ上達（マヽ）ひになりぬへき君なめれはつれなくいひていたしたるなめりかしなとのたまひて御返なし三の御子

159 235なかめする五月雨よりも歎つゝ月日のふるそ袖は濡ける（37・オ）」

ときこえ給へり御返事なし仲頼

160 236思ふ事なすこそ神もかたらめしはしなくさむ心つけなん

行政

161 237いふ事にいらへぬ人はつらからて思ひそめたる身を（本ノマヽ）○うらむる

ときこえ給へりとなん五月五日つとめてあやめのなかくしろき根をみてしゝうの君きこえ給ふ

162 238泪川汀のあやめ引ときは人しれぬねのあらはるゝかな

宮は蔵人の兵衛佐行正をめして大將とのにかくいひつかはすはかなくかゝ（37・ウ）」えものせられたるをあるしの事なとをいかにとなん引出物なともともしくは内侍料なともあまたものせらるらんを御心にまかせて物せられよとてかはらけにかく書付給ふ

163
239所せき身はよそなれとあそふなる宿に心を忘もやる
かな
かくて五月雨にも成ぬれは右のおとゝかんたち
めなとあつめ給ひてかはらけとりまはし給ふに
郭公なきわたりけれは」(38・オ)
164
241郭公なくねひさしく成ぬるをさみたれなからいくよ
ふれはそ
あるしのおとゝ
165
242時鳥花立はなにやとれはそ猶五月雨もときは成へき
人〳〵かくたはふれてあそひあかしかへり給ふ
に春宮きこしめしてかく聞え給ふ
166
243ためしにも人の引へき時鳥この五月雨を今もあへな
ん
ねたくもおもほされすや猶はやくをときこえた
まへりあて宮
167
244いはさらむ事そくるしき憂にこそ世の例にもあると
いふなれ
兵部卿の御子」(38・ウ)
168
245よ所にのみ思ひける哉夏山のしけき歎は身こそ有け
れ
左大將とのより
169
246侘はてし何の心もなけれとも猶なつのよはなかくも
有かな
中納言より
170
247侘ぬれは五月そ惜きあふちてふ花の名をたに聞と思
へは
源宰相
171
248沈みぬる身にこそ有けれ泪河うきても物を思ひける
かな
身の徒になるともおもひ給へすこゝろさしのむ
なしうなるこそいみしけれなときこえたまへり
あはれと見給へと御返事」(39・オ)なし三の御子
172
249君か為かろき心もなき物をなみたにうかふころにも
有かな
紀伊国より
173
250いつこともまた白雲の侘しきはいひやる空のなきに
そ有ける
藤侍従五月のつこもりの日くちたる立花のみに

かく書付て

174 251 橘のまほしも月にくちぬれは我もなこしをいかゝと

そ思ふ

さみたれのすくるもおそろしくなんしゝうの君

175 252 うらやましやかて入ぬる夏虫やたえぬ思そ侘しかり

（39・ウ）

ける」

少將

176 253 詠めつゝ常にくもらし橘はつねに空なるみとやなる

らむ

らうすけ

177 254 山も野もしけくなれ共我宿のまたことのはもみえす

も有哉

釣殿にてけふすゝませ奉らんけうあらむくたも

のなとたまへはなときこえおき給ひて釣殿にい

て給ひぬとなんきんたちさなからさふらひ給へ

は大臣御扇にかくかき付て式部の宮のかたへま

いらせ給

178 255 枝茂み露たにもらぬこかくれに人待かせのはやく吹

（40・オ）

かな」

御子見たまひて右の大殿へかくかきてまいらせ

給ふ

179 256 木かくれに寒く吹らむかせよりもうちなる枝の陰そ

涼しき

右のおとゝ見給ひて中宮に奉れ給

180 257 風にさる物こそ誰もすゝみぬるもとのかけをも頼む

物から

みこ見給ひてかく書付て民部卿とのに奉れ給ふ

181 258 こかくれはかけにまとゐるもえまつのねより起たる

末にあらすや

民部卿との

182 259 大かたのかけとは見つゝ東風かせの吹こかくれとし

（40・ウ）

らすそ有ける」

左衛門督殿

183 260 我たのむ千とせの陰はもらすして松かせのみそ涼し

からなん

藤宰相殿

184 261 まとゐする千とせの影のうれしきはもるともなけの

松のかけかは

中將

185 262ひはことに千とせのかけをそふる松幾世限れるよは
ひ成らむ
あるしのおとゝけふこゝにこのすき物ともひと
りなきさう〳〵しやなかすみは藤侍従よひにや
れかしふかきちきりある人もよしあるおりをす
くさぬそよきなと」(41・オ)の給へはをとろきての給ひ
つかはしけれは三所なからあそひ人といてきて
舟にのりて釣殿へまふつあるしのおとゝ白き綾
のおほんそぬきてしゝうに給とて

186 263ふかき池の底に生つゝひしつむとけふくる人の衣に
そする
侍従

187 264底ふかくおひけるものをあやしくも上なる水のあや
とみる哉
琴かきならしてあるに鳥とりのほのかに鳴を藤
侍従きゝてさうのことにかく」(41・ウ)ならす

188 265我のみとおもひし物を鳥鳥のひとりうかみてねをも
なくかな
とあるかなきかにかきならすあてみや(マヽ)
きんの御ことに

189 266にほとりの常にうかへる心には音をたにたかくなか
すもあら南
なとの給ふほとに内より藤しゝうたゝいままい
り給へせんしなりと云なかたゝあなわりなや折
しもこそあれわりなきめしかなといひてたゝい
ままいりてなんとてまいりぬ左大將とのなとか
すゝみには」(42・オ)いて給はさりつる釣殿御らんせさ
せてしつるを闇のよの錦とかいふやうになん宮
人すゝみ給へれはこゝまてなんとて

190 267枝ことにわかすや風の吹つらんこもれるねさへ涼し
かりつる
おとゝ

191 268おく山に松のふるねをのこしてはきしになひくそか
ひなかりつる
又神楽十七日になんすへきそのまうけせさせた
まへ宮おもしろからん所こそよからめおとゝ左
大將のぬしのなかたゝか母する給ひたるところ

なかたゝか心に入てつくらせたる所」（42・ウ）いとおもしろしとなん

かくて春宮より蔵人を御つかひにしてかくきこえ給へり

192 271打はへて我につれなき君なれはけふの御祓もかひなかるらん

あて宮

193 272逢事のなこしのはらへしつる哉おほぬさならん人をみしとて

藤侍従御まへのわたりにたちよりそわうの君にものいひなとするにわきいてたる水をみて

194 273河辺なる石のおもひの消ねはや岩の中より水のわくらん」（43・オ）

そわうの君のいらへ

195 274底をあさみ石間を分て行水のわくとみれ共ぬるまさりけり

なといふほとに例のさいしやう兵衛の君のもとにあるふみをきんたちこれかれみ給ひてうちわらひつゝものもの給はぬをきゝて又かくきこえたり

196 275我ふみはやをよろつ代の神ことによむとも数はつきすや有覧

あるとき春宮より常夏の花を折てかくきこえ給ふ

197 276独のみわかふす宿の常夏は常にをりうき物にそ有ける」（43・ウ）

今はすみうくさへになんあて宮

198 277しら露のをきかはるなる常夏をいつれのをりに独みるらん

例の宰相ひさしくてりたる日盛に

199 278大空も我こともの思ふらん草木こかれてれる夏の日

あて宮

200 279時のまにいらぬ宿なく照日には君さへなとかをとらさる覧

兵部卿宮より夕立のいたうするをりに

201 280年ふれといとゝつれなくなる神のひゝきにさへやおとろかぬ君

あて宮

202 281 ひゝけともつれなき人はおとろかて雨雲のみもさは
くへき哉」(44・オ)

左の大將とのよりうみにのそきたるあまてる殃
浜にかくかきつゝ

203 282 わたつうみの底にみるめのおふれはそ我さへ頼むふ
かき心を

あて宮あさりしたるすはまにかきつく

204 283 あさりする海士はなにそも海といへと如何なる底に
生るみるめそ

平中納言殿より

205 284 見る人は小鹿のつのにあらねともなくさむほとのな
きそわひしき

あて宮

206 285 思ふらん事はしられて夏の野につのをちかはる鹿と
こそきけ

藤侍従はらへしに難波のうらへ下りてそ」(44・ウ)れよ
り

207 286 まとひつゝうみへこしかと住吉のおひすも有か恋わ

すれ草

あて宮

208 287 あた人の心をかくる岸なれや人わすれ草つみに行ら
ん

三の宮

209 288 鳴せみももゆる蛍もみにしあれはよるひるものそか
なしかりける

紀伊国より

210 289 常よりもなこしの月のわひしきはいむてふことのな
きにそ有ける

君達見給ふを侍従のきみをみてはしにかく書付
てあてみやにたてまつり給」(45・オ)

211 290 人はいさなこしの月そ頼まれしせゝのみそきにわす
らるやとて

かくしておとゝつくれりける文を一人にすんせ
させて御琴にあはせてまつことなくおもしろし
おとゝするふさに御かはらけ給ふ

212 296 色かへぬ袮をはをきて藤かえに秋(をイ)の山にもうつして
しかな

すゑふさ給はるとて

213 297 あらかねのつちの上より藤かつらはひてしけふそう
れしかりける

中將のおとゝ東面の竹のはに書つく

214 298 彦星の逢みてかへる暁も思ふ心のゆかすもある
（45・ウ）
かな」

奉りけれは春宮より

215 299 つれもなき人を待まに七夕の
あふよもあまた過に
（46・オ）
けるかな」

《以上、祭の使巻ニ相当ス》

（46・ウ）
「
（47・オ）
」

未見類本故以私了簡且校猶追可尋
（48・オ）
（47・ウ）
」

（相愛大学人文学部）
（財団法人青山会特別研究員）